

論文の要旨

ふりがな 氏名	ニン ガナン 任 雅楠
論文題目	日中におけるデューイ思想の受容と展望に関する考察 —大正期と中華民国期の比較を通して—
<p>論文の要旨</p> <p>研究の目的</p> <p>現在、日本と中国の両国は、知育偏重教育の弊害、いじめ問題等の克服に向けて、知情意・身体・徳と言う子どもの自身のホリスティックな資質や能力を育成する教育改革を進めている。それは、日本では「生きる力を育む教育」と呼ばれ、中国では「素質教育」と称される。</p> <p>しかし、そうした総合的な能力を支持しながらも、教育課程に対する「受験戦争」と「応試教育」の影響は依然として大きい。それに加えて、世界に広まる市場主義経済原理や成果主義の影響を受け、教育の場面において、功利の色彩がより一層濃くなっている。その意味で、当初の目的は達成できておらず、人間の総合的な発達、子ども中心を目指す教育改革は十分に実現されているとは言えない。</p> <p>このような理想と現実の二重構造の状況の下で、日中両国において、教育に関する様々な問題、つまり、受験競争の過熱、いじめ、学力低下、学級崩壊、暴力行為、薬物乱用、犯罪被害、少年非行、自殺、家出等教育荒廃の現象が現れている。加えて、近年では、急激な情報化社会の発展を受け、ゲームやインターネットの普及により、子どものゲーム・インターネット依存や、SNS上のいじめ問題も生じている。</p> <p>これらの問題を解決するためには、現在の体制を場当たり的に改善するのではなく、私たちがたどってきたそれぞれの教育史から類似の状況を抽出し、そこで試みられた理論と実践を相対的に振り返ることが有効である。具体的には、知育偏重の流れに対し総合的な「生きる力」を希求する現在と類似の教育状況にあった、日本の「大正新教育運動」(1920年～1935年頃)と中国の中華民国期(1912年～1949年)の教育を考察することが最も有益と考えられる。</p> <p>なかでも、当時の閉塞する教育状況を打破する思想として両国で最も注目されたアメリカの哲学者ジョン・デューイ(John Dewey : 1859年～1952年)の教育思想は問題克服の重要な鍵を有する。デューイの思想は当時、世界中で数多くの国に受容され、日本と中国にも多大な影響を与えた。</p> <p>日中両国で行われてきたデューイ研究は、大きくは二つの方向を持つ。一つは、デューイの思想研究であり、いま一つはデューイ思想の受容史研究である。</p> <p>前者の思想兼研究には、1936年にデューイの母国アメリカで発足したジョン・デューイ学会 (John Dewey Society 略称:JDS) が刊行する雑誌『デューイ研究(Dewey Studies)』、『教育と文化(Education and Culture)』、『学校・社会ジャーナル(Journal of School&Society)』があり、日本では、1957年に発足した日本デューイ学会(John Dewey Society of Japan)の『日本デューイ学会紀要』が多岐にわたるデューイ思想の研究を掲載している。</p> <p>後者の内、中国における受容史研究には、蕭超然(1997)「蔡元培と近代中国の教育改革」『東アジアにおける近代化の指導者たち』(中国国際シンポジウム)、単中恵(2002)『現代教育の探索：デューイと実用主義教育思想(現代教育的探索：杜威与实用主义教育思想)』(人民教育出版社)、王彦力(2008)『「対話」に向かって進む：デューイと中国教育(走向“対話”：杜威与中国教育)』(教育科学出版社)、川尻文彦(2009)「陶行知とデューイの訪中：民国初期中国教育史の一側面」森時彦編『20世紀中国の社会システム』(京都大学人文科学研究所)、日暮トモ子(2014)「近代教育学が持つ文化支配への対応：中国の教育近代化にお</p>	

けるデューイ解釈を手掛かりに『近代教育フォーラム』(第23巻)、上野正道(2014)「デューイと中国：デモクラシーの教育をめぐる」『近代教育フォーラム3』(第23巻)、山下大喜(2019)「哲学方法論史からみた胡適思想の系譜」(哲学若手研究フォーラム発表原稿)等の研究がある。

日本における受容研究については、武田一郎(1964)「デューイとわが教育界の戦前・戦後」日本デューイ学会編『デューイ研究』(玉川大学出版)、行安茂(1998)「道德教育に対するデューイの影響」杉浦宏編『日本の戦後教育とデューイ』(世界思想社)、関松林(2008)『交流と融合：デューイと日本教育(交流と融合：杜威と日本教育)』(教育科学出版社)、西尾理(2012)「デューイ教育学の日本の学校教育への導入に関する一考察」『埼玉学園大学紀要』(経営学部篇)、等の研究が挙げられる。

ところが、これらの受容史研究において日本または中国におけるデューイ(教育)思想の受容に関する考察は深められているものの、日中(あるいは日中と他国)比較の視点からの考察は存在していない。日本と中国は政治・経済体制としては異なるが、一衣帯水の地にある隣国であり、歴史的には共に儒教思想の影響を受けている。この両国が、当時、観念論や功利主義の克服を図るデューイ思想に注目し、その受容を目指すことになる。本論文は、この点に何か共通の要因があるのではないかとする仮定に立ち、考察を進めていく。

以上の研究状況を踏まえ、本博士論文では、デューイ研究において今日まで最も手薄である「デューイ(教育)思想受容に関する日中比較」に焦点を当て先行研究を補足することを目的とする。具体的には、両国にデューイの(教育)思想を紹介・主導した人物である谷本富、蔡元培、陶行知、胡適を軸に、受容の内容を比較検討していく。その際、各紹介が日本や中国の伝統文化と如何に融合しつつ受容されるのかについての実態も考察していきたい。この研究によって、同じく儒教思想を基盤に持つ日本と中国が、どのようにプラグマティズムに位置付けデューイ(教育)思想を移入し、教育現場へと応用したのかについて、比較の観点から一つの回答を示すことになるだろう。これらを明らかにした上で、今日の両国の教育のあり方を、デューイ思想との関係と、デューイ思想の受容史との関係で考察し、両国が抱える教育問題に対する解決策を提示したい。

研究の方法と内容

研究の方法としては、本博士論文は文献研究に基づき進められる。まず、先行研究の分析を通して本研究の位置付けを明らかにし、日中の教育課題を公文書のデータをもとに浮き彫りにし、次に、デューイ思想の内容理解については主要な英文著作を考察の対象とする。最後に、日中におけるデューイ思想の受容比較に関しては、蔡元培・陶行知・胡適の中国語原著ならびに谷本富の原著に基づき考究していく。具体的な研究内容は以下の通りである。

序章では、まずは、研究背景を紹介し、先行研究を整理することで本研究の位置付けと研究意義を明らかにする。

第一章では、日中における教育の現状と課題について把握していく。日本については、国立教育政策研究所子ども指導研究センターと文部科学省から公開された近年の資料・データを参照し、教育の現状と課題をまとめていく。中国に関しては、中華人民共和国教育部等の公的な機関が作成した書類・資料に基づいて、教育の現状と課題を明らかにしたい。

第二章では、デューイの生涯をおさえた上で、デューイ思想の根幹を規定する認識論を解明し、さらにプラグマティズムに基づく彼の思想の全体像を描き出す。対象とする文献は、デューイの名著 *Democracy and Education* (1916)、*Reconstruction in Philosophy* (1919)、*Experience and Nature* (1925)、*Art as Experience* (1934)とする。

第三章では、その哲学に基づくデューイの教育思想の全体的な構図を明らかにする。具体的には、*The School and Society* (1899)、*Democracy and Education* (1916)、*Experience and Education* (1938)等の原著を参照し、教育の本質論、内容論、方法論、職業教育、道德教育等を解明する。

第四章では、まず、日中におけるデューイ思想の受容を考察する。日本については、大正新教育運動におけるデューイ(教育)思想の影響と位置付けを明らかにした上で、主な紹介者として知られる谷本富の思想と教育実践を考察の対象とする。具体的には、谷本富の『新教育講義』(1906年)、『系統的教育学綱要』(1907年)を考究していく。中国に関しては、主な受容・紹介者である蔡元培、陶行知、胡適の思想を考察対象とする。具体的には、『蔡元培教育文選』(1980年)、『蔡元培全集』

(1984年)、『陶行知全集』(1984年)、『胡適全集』(2002年)等に基づき、各人とデューイ思想との関係を解明していく。次に、以上の考察を踏まえ、日本と中国におけるデューイ思想の受容を比較・考察する。とりわけ、儒教思想を基盤に持つ日中の知識人たちがプラグマティズムに立つデューイ思想を如何に受容し実践に応用したのかについて明らかにしたい。

第五章では、第四章までに解明された両国におけるデューイ思想の受容特徴を踏まえ、各々の国が抱える教育問題への解決策を提示する。日本と中国は一衣帯水の地にある隣国であり、また、共に儒教思想の影響を受ける国でもある。その両国が、教育においては知育偏重主義に対してホリスティックな教育を求め、哲学においては観念論や功利主義の克服を目指してデューイ思想の受容を図った。そこに何か共通の要因があるのではないかと仮定できる。この仮定への回答は終章で示唆される。

終章では、本論文の内容を第一章から第五章まで振り返って整理した上で、今後の課題と展望を明らかにしたい。たとえば、現実の生活を軸に、人間—自然、精神—身体、主観—客観、個人—社会、理論—実践、理性—感情の即応と統合を語るデューイと今回取り上げた日中の思想家(谷本富、蔡元培、胡適、陶行知)の思想的重なりから、「儒教的プラグマティズム」とでも言う共通のパラダイムを描出していく。